

グローバルスポーツシーンにおける 『コリアン』・アイデンティティの変容 —— ある『在日』野球選手の事例から ——

石原 豊一

(立命館大学大学院国際関係研究科博士後期課程)

はじめに

グローバル化の進展に伴ってアイデンティティに焦点が当てられることが多くなっている。そして、そのアイデンティティは国民国家の枠組みで語られることが多い。このことは、グローバル化という現象が国民国家の形成を伴った近代化と同時進行で進展したことから当然のことであると言える。

本稿においては、グローバル化の進展により変容するナショナルあるいはエスニックなアイデンティティの新たな潮流をスポーツに見ていく。スポーツの社会学あるいは人類学的な研究におけるナショナルな枠組みについての関心は、競技スポーツが国際的イベントとしてスペクテイター・スポーツへと変貌を遂げる過程において高まったといえる（金：2009, 37）。様々なスポーツが資本と結びつくことにより競技者にとって職業と化す中、近年ますますその量を拡大しているスポーツの技能を携えて国境を渡るスポーツ労働移民の観察からは、各々のアスリートがグローバルに拡大する資本と結びついたスポーツに一見翻弄されながらも、自己のアイデンティティを場面に応じて変容させ、プレーの舞台を移していく様子が読み取れる。そこからは、グローバル化した世界におけるアイデンティティの可変性と複数性をうかがうことができる。

本稿は、スポーツの資本と結びついたグローバルな拡大によって様々な変容を遂げたナショナル、あるいはエスニックなアイデンティティについての先行研究の延長線上に、従来注目を当てられることの少なかった底辺のプロスポーツ選手、それも日本においてマイノリティ集団として位置づけられる在日コリアンの野球選手の事例を乗せていくものである。そこからは、近代を通じて人々の間に所与のものとして認識されるようになったナショナルまたはエスニックなアイデンティティが、グローバル化の進展により、ある種の記号と化している様子がうかがえる。

1. 研究方法

本稿において採り上げるのは、ひとりの在日コリアンの野球選手である。国民国家体制の下における彼らのエスニック、ナショナルなアイデンティティの特殊性は、日本社会においてマイノリティとして存在してきた歴史や、祖国においても特殊な集団として扱われることが多い現実からうかがうことができる。筆者は、日本に生まれ育ち、プロ野球選手という夢を追いかけて越境を重ねた若者に1年余りの

間インタビューを重ね、彼が「在日コリアン」という立場において、いかに自身のアイデンティティを変容させ、やがてその出自から来るアイデンティティを利用したかを探った。

インタビューは、2010年7月から2011年10月にかけて、試合前後、あるいはプライベートな時間に本人から直接話を聞くかたちで行った。また、本人を採り上げた新聞記事の連載（大西：2010）も参考した。

2. 日韓のスポーツを巡るアイデンティティの問題

Klein（1991）は、ドミニカ共和国への野球の浸透に米国の政治経済的覇権主義の表れを見、強者である米国スポーツである野球を受容したドミニカのひとびとが、政治経済的には実現できない米国に対する勝利を実現するツールとして、その野球を利用していることを指摘し、スポーツを「抗争の場」と位置付けた。

このようなスポーツを通じた強国との対戦により覚醒されるアイデンティティの問題は、植民地支配を受けた韓国・北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）と旧宗主国日本との間にもみられる。コリアンにとって、スポーツは日本に対抗する「抗争の場」であり、スポーツを通じた「克日」はコリアンのアイデンティティを覚醒させるツールとなった（大島：2008）。

野球に関して言えば、朝鮮半島にこの米国発祥のスポーツが伝来したのは、日本より少し後の1905年のこととされる（Reaves: 2002）。しかし、その浸透は日本の植民地支配と並行したものであり、朝鮮半島のひとびとにとって、野球は「日本のスポーツ」であった（大島：2006）。

「日本のスポーツ」であった野球に対して、サッカーは植民地支配下の朝鮮にとって「国技」と化していった¹⁾。森津（2011）は、日本統治時代の朝鮮半島におけるスポーツ大会やその報道の分析から「内鮮融和」を推進する統治者側の意図を読み取った。その上で、日本人選手やチームが、「憧れ」「手本」として報道される一方で、コリアンのチームが優越するサッカーが彼らの「民族スポーツ」と認識されたことから、スポーツの普及を統治ツールのひとつとみなす支配者側の意図に反して、被支配者側にとっては、スポーツが抵抗の手段となることを論証している。植民地支配を脱した後も、自国に先んじて戦後の荒廃から経済発展を遂げた旧宗主国への対抗意識は朝鮮半島の人々から消えることはなく、戦後初のサッカーの日韓戦に際しての「負けるようなことがあれば、帰途、玄界灘に身を投げてこい」という李承晩大統領の発言（大島：2006, 106）や、近年のサッカーや野球の日韓戦における熱狂ぶりにその意識の強さは表れている。また、金（2009, 77）は、1970年代に韓国の独裁政権を正当化するためのプロパガンダとしての国際大会開催や、その後1983年に日本に先んじて始まったプロリーグがメディアによって国民の目に焼き付けられたことは、韓国人にとって、「国民の一体化」という言説を実体化させる役割を果たしたことを指摘している²⁾。以上のように、スポーツは朝鮮半島においてもコリアンのアイデンティティを刺激するものとなったが、その触媒となったのが、日本という隣国の存在であったと言える。

人の流れについて言えば、支配＝従属関係を通じて野球が伝わったドミニカと米国との間で、ドミニカから米国へという流れができたように、日本と朝鮮半島の間にも同様の流れができた。その結果発生したのが「在日コリアン（以下在日）」という集団である。

グローバル化の進展の中、空間を越えた共通のアイデンティティが構築されることについては、多くの識者が述べているところである（アパデュライ：2004、アンダーソン：2005、Bruce & Wheaton：2011）。しかし、「在日」のようなディアスポラの集団は、その語源ともなったユダヤ人の離散に代表されるように歴史上多く存在した。

鄭は、「在日」について、コリアンとしてのアイデンティティは保ちながらも、心理・文化的には定住先の日本人と似通った「日本語人」、「日本文化人」とでも言うべき存在であるのだが、日本社会においてもこのグループは異質の存在であるとする。

さらには、この種のディアスポラ集団がある国家においてエスニック集団として固有性を維持することはあっても、国籍を異にした「外国人」集団として存在することは特異であるとし、ナショナル・アイデンティティと国籍のズレが存在する定住先で生まれ、定住先の言語、文化を吸収しながらも制度的には外国人であり続けている「在日」は世界的に見てまれな集団であるとした（鄭：2003, 29,112）。

無論、本国である韓国（もしくは北朝鮮）に対する「在日」の視点は、日本人のそれと一致するわけではない。その一方で本国への帰属意識も強いわけではない。このような不安定なアイデンティティを持つ「在日」が、スポーツ労働移民として本国に「帰還」することは非常にまれな例であると言える。このような「在日」アスリートのアイデンティティの相克を描いたのが関川（1988）や鄭（1989）のルポタージュである。

米国、ドミニカ間において、歴史的経緯から発生したドミニカ出身の移民が野球において成功したとき、現地社会から「アメリカ人」として受け入れられるケースがある一方で、成功がかえって現地人からの攻撃を促す場合があり、あるいは成功して現地社会に受け入れられたと思われた者でもなにか不祥事が起こればたちまちのうちにアウトサイダーのレッテルが張られることが報告されている（King-White:2010）。同様の構図は、「コリアン」の野球選手を巡っても見られ（大島：2006）、移住先の日本社会においても、祖国韓国においても周辺的地位に置かれた「在日」は、日本プロ野球界において、ルール上は日本生まれの者として日本人選手と同様に扱われるが、現実にはアウトサイダーとしてヒエラルキー構造の下部に置かれていた（Reaves, 2002, 128-129）。

3. 在日コリアン独立リーガーのストーリー

本稿の研究対象であるTは、1984年3月生まれで、2011年現在27歳、千葉県生まれの在日3世のコリアンである。幼少時から出自を自覚し、周囲にも隠すことはなかったが、小学校時代になると、「いじめとまではいかないが、意地悪をされるように」なり、成長するにつれて「在日」であることを自ら語ることはなくなった。

空手と野球を始めた小学3年頃になると、彼は、その卓越した運動能力を周囲に見せつけることにより、次第に一目置かれる存在となった。それでも、自らのルーツについてのコンプレックスは消えなかったという。

高校は、野球では無名校に進んだが、エースで四番を打ち、本人いわく「ひとりで野球をしていた」状態であった。主将になった3年生の頃には、プロに進むという確固たる目標を持つようになったが、

無名校のワンマンチームでの活躍は、プロのスカウトの注目を集めるところとはならなかった。

しかし、彼はプロ野球選手という夢を諦めきれず、野球雑誌で「ベースボール・アカデミー」³⁾の広告を見つけ、米国への野球留学⁴⁾を決意した。

高校3年の11月、アカデミーが日本国内で実施したトライアウト(テスト)を受験し、これに合格した。参加費や渡航費のかかるこの挑戦に、彼の父親は快く協力してくれた。費用に関しては、結局、彼の運動能力がアカデミーの目に留まり、参加費が免除され、交通費などの必要経費のみで参加できるようになった。高校卒業を控えた1月に彼は渡米したが、プレー中に怪我をしてしまい、米国でのプロ契約を勝ち取ることはできず、3月には帰国し、高校を卒業した⁵⁾。

この過程において、出国準備から帰国まで、日本在住の韓国人という理由から日本国籍所得者に比べ著しく煩雑だった様々な手続きを通して、彼は「コリアン」であることを強く意識したという。

彼は帰国後大学受験し、合格した大学に進学して野球を続けることになった。しかし、高校時代ワンマンチームのリーダーであった上、米国でフランクな人間関係を体験した彼は、日本の体育会特有のタテの人間関係に馴染むことができず、1年生の秋季シーズンで野球部を退部、さらには退学した。学業を苦手としていたわけではなかった彼にとって、単位をとって卒業することは難しいことではなかったが、プロ野球選手という目標を捨てていなかった彼には、野球のない学生生活は想像の及ぶところではなかった。

その後、彼は、1年間フリーター生活を送ったが、アカデミー時代に知り合った知人が紹介してくれたスカウティング・リーグ⁶⁾でプレーするため、20歳になった2004年の夏に、再び渡米した。この時、前回の渡米の際の煩雑な手続きを避けるため、Tは日本国籍を取得した。「野球するのに国籍は関係ない」と考えたのがその理由である。

人種のサラダボウルとも称される野球の本場米国には、世界じゅうの民族、人種が集う。ナショナルパスタムである野球の世界においても同様で、今や世界36の国と地域からアメリカンドリームを求めてバットとグローブ片手にプロリーグに参加するようになっている(石原:2010a)。

しかし、ここでも国籍の壁は大きく立ちはだかった。日本国籍は、日本から米国への渡航には韓国籍に比べ便利にはなったが、就労ビザの取得に有利に働くわけではなく、結局彼はこれを取得することはできず、スカウティング・リーグからプロの世界へ行くことは叶わなかった。彼はリーグ終了後、日本に帰ったが、この時には彼の中で、米国でのプレーの夢は絶ち難いものになっていた。3ヶ月の間ほぼ毎日、90試合を消化するという環境は、プロとしてプレーを続けていく自信をさらに深めるのに十分なものだった。しかし、この自信を具現化すべく日本のプロ野球(NPB)の選手を目指してステップアップをはかろうにも、大学野球を途中で辞めた選手にそのチャンスを与えてくれる場は当時の日本にはまだなく、帰国後受験したNPB球団のトライアウトにも合格することはなかった。

結局Tは、スポーツの専門学校に特待生として入学することにした。そして2年の在学中に、彼はスキーやキャンプのインストラクター、シュノーケル指導員やパソコン検定などの資格を手にした。

2007年春に専門学校を卒業すると、彼は就職し、就職先の会社が立ち上げた実業団チームでプレーすることになった。しかし、このチームの運営が頓挫すると、彼は会社を1年足らずで辞めた。そして、シーズン途中に行われた独立野球リーグ⁷⁾のトライアウトに合格し、四国アイランドリーグ(現四国ア

イランドリーグプラス)の徳島球団に入団した。これは、彼にとっては初めてのプロ野球選手経験であったが、彼の目標はあくまでNPBであり、ここでのプレーはその登竜門に過ぎなかった。しかし、彼はここで満足な成績を残すことができず、シーズン終了後に解雇された。

翌2008年には、彼は再び海を渡り、カナダのセミプロリーグ⁸⁾のチームに入団したが、これも成績が振るわず、3か月で戦力外通告された。それでもあきらめきれなかった彼は、このシーズンの終了時までカナダ国内の独立野球リーグのチームの練習に参加するなどしてプロ野球選手への道を模索したが、結局これも叶わず、帰国して営業職に就いた。

しかし、2度目のサラリーマン生活が1年も経とうとした2009年11月、この年の春に発足した関西独立リーグに韓国人球団が加入することになり、在日コリアンの選手を募集することを知ると、彼は再びプロ野球選手という夢に挑戦すべく、トライアウトを受験し、これに合格した。そして、26歳になった2010年シーズンを「韓国ヘチ」⁹⁾球団(以下韓国球団)で再び独立リーグのプロ選手として送ることになった。彼が所属することになった球団は、学卒後の選手の受け皿の少ない韓国人選手にプレーの場を与えるべく、この年から発足した韓国資本による球団で、所属選手は基本的に韓国人でまかなう予定であったが¹⁰⁾、ロースターの不足分を「在日」の選手で埋めることになった。国籍を変更したとは言え、コリアンとして生まれたTも「在日」としてこのチームに入ることが認められたのだった。

このチームで初めてプロとしてフルシーズンプレーし、好成績を残した彼は、そのシーズンが終わるとオーストラリアへ渡った。関西独立リーグはこのシーズンの途中で選手への給与の支払いを辞め、事実上プロリーグではなくなり¹¹⁾、翌シーズンのリーグ運営も不透明だったため、上位リーグへの新たなステップアップの場を再び国外に求めたのであった。現役メジャーリーガーも参加するこの年から再開されたプロリーグ¹²⁾の球団との契約を結ぶことが目標であったが、すぐにはかなわず、外国人選手も受け入れているアマチュアチームでプレーしながら、トライアウトを受験するなどしてプロチームと契約を結ぼうと目論んだ。しかし、結局プロリーグでのプレーは叶わなかった。そして、翌年の2月の帰国後も彼はプロ野球選手になるという夢をあきらめず、前年にプレーした関西独立リーグの大阪球団に入団し、アルバイトをしながら無給でプレーすることにした。

4. グローバルな移動により覚醒される「コリアン」・アイデンティティ

インタビューにおいて、T自身は、「コリアン」であることについて否定的にはとらえてはいなかった。しかし、現実には彼のライフストーリーの多くの場面で、「コリアン」の出自はマイナスになることはあっても決してプラスになることはならなかった。少年時代、家庭での韓国式の年中行事に違和感を覚え、父親と口論になったことや、友人に在日コリアンであることをなじられた経験は、彼の中で「コリアン」であることが心地の良いものではなかったことを示している。そのため、20歳の時の帰化には抵抗はなかったという(大西:2010)。

そのような生い立ちの彼であったが、帰化し、国籍においてはすでに「日本人」になっていながらも最初のインタビュー当時は、自らのアイデンティティを「コリアン」に重ね合わせていた。

とは言え、幼少時から自覚せざるを得なかった「コリアン」・アイデンティティを青年期に至るまで彼

が強く持ち続けていたわけではないだろう。既に3世という彼の在日としての立場は、祖国である韓国をすでに意識の中で遠いものにし、幼少時には友人にそのことをなじられたことはあったが、少年期を迎える頃には、その卓越した運動能力をもってクラブ活動では、常にリーダー的存在であった彼が「コリアン」を意識することは少なくなっていった。そもそも韓国語も話せず、通常は日本名を名乗っていた彼は、むしろ青春時代を「日本人」として過ごしたと言える¹³⁾。そのようなTが「コリアン」としての意識を再活性化させたきっかけは、3度にわたる北米での生活であった。最初の渡航の際、必要となるパスポートや外国籍という理由から煩雑になった渡航手続きは、いやがおうにも韓国籍という現実を彼に突きつけた。それがゆえに彼は日本籍を取得したのであるが、このことが彼の「コリアン」・アイデンティティを弱めることはなかった。米国での生活を振り返っての彼の発言はこのことを物語っている。

「やっぱり俺ってコリアンだなってアメリカで思ったんですよ。ほら、普通の日本人ならいきなり行かないでしょ。なんのつてもなしにいきなり向こうの(プロ)チーム訪ねて、入れてくれ、なんて日本人にはできないでしょ。そういうときやっぱりコリアンだなって感じるんですよ。」¹⁴⁾

彼は、プロ野球選手という夢を追い続けての自分の行動の無謀さゆえに自己を「コリアン」に同定した。しかし、グローバル化の進む現在自己実現のための日本の若者の国際移動は珍しいことではなくなっている(藤田：2008、加藤：2009、石原：2010c)。その無謀さはある意味若者の特権であり、元来国籍や民族などとは無関係であると言えるのだが、ここで重要なことは、その若さゆえの無謀さの原因を「コリアン」という血統に求め、彼自身が、越境を繰り返すことにより、「(在日)コリアン」というアイデンティティを再活性化させたことである。

彼は北米でプロ野球選手を目指して受け入れ先を探していた時期、自分を「コリアン」と表現していたという。日本で青春時代を過ごしていた時には埋没させていた「コリアン」としてのアイデンティティは、多民族国家である米国やカナダにおいて自己を他者に表現するとき、彼の中で再生されたのである。自己定義を政治的な枠組みである「米国民」や「カナダ国民」として行う一方、エスニックな出自においても行いうる社会において、韓国のパスポートを日本のそれに替えたところで、それは、彼の自己定義においては「コリアン」としてのエスニックなアイデンティティに、渡航の便宜上取得した「日本国民」としてのラベルが貼り付けられたに過ぎなかった。

そして、野球を通じての越境を重ねた結果、再活性化された彼の「コリアン」・アイデンティティをさらに強めることになったのが、韓国球団でのプレーであった。トライアウトの時、彼は使用しなくなった韓国のパスポートを持参したという(大西：2010)。リーグは彼の当時の国籍を問題にはせず、「在日」として韓国球団への入団を認めた。そしてシーズンが始まると、球団の方針から彼はそれまで封印していた韓国名で登録されることになった¹⁵⁾。

まだスポーツの世界において日韓の国境がアスリートの間に大きく横たわっていた1980年代、日本球界から発足間もない韓国プロ野球に身を投じた僑胞(在日コリアン)選手たちは、日本では封印していた韓国名を名乗ることにより自身のアイデンティティの重層性を改めて自覚するとともに、「コリアン」である自己を確認したが(関川：1988)、Tにとっても韓国名を名乗ることは「コリアン」である自己

を再確認することになった。

そして、オーナーから選手に至るまで韓国人という球団にあって、「在日」という出自ゆえにこれに参加できた事実は、彼の「コリアン」・アイデンティティを覚醒させたことは間違いない。また、チームが合宿所をおいた大阪・生野のコリアンタウンでの生活もまた彼に自身のルーツを再確認させる役割を果たした（大西：2010）¹⁶⁾。

5. 想像上の「コリアン」：「在日」というアイデンティティ

Tは、10代終わりから20代半ばに繰り返したプロ野球選手になるという自己実現のための越境や日本での独立リーグ選手としての体験を通じて、自己の中で封印していた「コリアン」というアイデンティティを再活性化させたと言う。しかし、それと同時に、日本で所属した韓国人主体のチームでは、プレースタイルの違いや言語の違いなどから彼は、自らが「韓国人」ではないことも自覚させられた（大西：2010）。

同じスポーツを競技しながらも、そのプレースタイルの相違などから、越境したアスリートが、自分がアウトサイダーであることを自覚させられることについては、すでに指摘されているが（Klein：1995、ホワイトティング：1980, 1990）、Tもまた、越境を通じて自覚した「祖国」の選手に交じってのプレーにおいて、自分がそのアイデンティティを覚醒させたはずの「コリアン」ではないことを自覚させられた。野球を通じての数度の越境や独立リーグの韓国球団での経験を通じて「コリアン」としてのアイデンティティを再活性化させたものの、現実には、日本に生まれ育ち、もはや韓国語も話せない彼は「日本文化人」（鄭：2003, 29）でしかなかった。

6. 変容するアイデンティティ

韓国球団でのプレー後、彼は豪州へと渡った。アルバイトをしながらブリスベンのアマチュアチームでプレーしながら、プロ球団との契約の機会をうかがっていたが、結局その夢は叶わなかった。彼は豪州滞在中の約3か月の間、ポリネシア系移民のもとでホームステイしながら、日系人に紹介してもらったチームでプレーした。

渡豪前、彼は自身を「コリアン」と定義し、おそらくオーストラリアでは「日本在住のコリアン」と自称するだろうと語っていた。また、自分が目標とする当地のプロリーグとの契約が成就し、シドニーのチームと対戦した暁には、韓国プロリーグ（KBO）の球団を退団し、家族のいるオーストラリアでプレーを継続することになった韓国球界の英雄ク・デソンに会い、「コリアン・ジャパニーズ」として彼と話してみたいとも語っていた¹⁷⁾。

しかし、プロ野球選手という夢を追いながら越境を重ねることによって再活性化された彼の「コリアン」としてのアイデンティティは、渡豪時には変容していた。オーストラリアというマルチエスニックな環境において、国籍やエスニックアイデンティティは、彼の中で大きな役割を果たさなくなっていた。

彼が当地で目指していたプロリーグには、ニュージーランドで生まれ、豪州で野球を覚えた選手や、

豪州に生まれ育ったがそのルーツからワールド・ベースボール・クラシックの南アフリカ代表としてプレーした選手、そして年の大半を北米で過ごすメジャーリーガーやマイナーリーガーが集っていた。このような事情は彼が所属していたアマチュアチームも大差なかっただろう。豪州の野球を取り巻くこのような環境は、国籍やエスニックなアイデンティティに対するこだわりを彼から奪い去っていったとも考えられるが、このような環境は米国やカナダにおいても大差はないものである。

渡豪前の韓国人チームにおいて彼が自覚させられたのは、「在日」としての「コリアン」・アイデンティティであった。「同胞」とのプレーや祖母がかつて生活していたコリアンタウンでの生活は、「祖国」を意識させることはあったが、同時に彼は自分がもはや韓国文化圏に存在しない者であることも自覚した。このことは「コリアン」を彼の中でひとつのアイコンに過ぎないものに変容させていた。

豪州で出会った彼は国籍やエスニックなアイデンティティについて、それらはもはや彼にとって意味をなさなくなったと語った¹⁸⁾。野球というスポーツの技能を携え越境を重ねた彼は、「ノマディック・コスモポリタン」(Maguire: 1996) と化し、ナショナルあるいはエスニックなアイデンティティを超えたコスモポリタンなアイデンティティを構築していったのである¹⁹⁾。

Molnar (2011) は、社会主義圏の崩壊により経済的豊かさを求めて東欧から西欧へ、また東欧圏諸国相互におけるスポーツ労働移民が発生したことを分析し、クロアチア、スロバキア、セルビアからハンガリーへ移動したサッカー選手の多くが、ハンガリーの主要エスニック・グループであるマジャール系の出自からその移動を行ったことを指摘している。ここでは、「マジャール」というエスニシティはアスリートにとってアイデンティティに関わるものよりも富を求めての移動のためのツールと化していると言える。同様に T の場合も、越境を繰り返す間に「コリアン」はもはやスポーツを通じた自己実現のツールと化していた。

しかし、国籍取得者としての「日本人」やエスニックなルーツに由来する「コリアン」、それに日韓両国におけるマイノリティとしての「在日」というアイデンティティは、彼の中から消え去ったわけではない。日本の独立リーグでプレーするときにはもはや使用しなくなった韓国のパスポートと韓国名を携えてこれに参加し、豪州においては、相手に応じて「ジャパニーズ」と「コリアン」を使い分ける彼の様子からは、時として外部から押し付けられ、また、様々な経験から内発的に「想像」されるアイデンティティを、自己の都合により使い分けるしたたかさが浮かび上がる。

彼が行おうと、もしくは行っているプロ野球選手という自己実現を主要因とする越境は、藤田 (2008) が指摘する音楽関係の職業などの文化的職業への就業をそれが実現できなかった母国ではなく第三国で求めようとする「文化移民」のひとつのかたちであると言えるが(石原:2010c)、繰り返しの越境において、T は再活性化された自己のエスニックなアイデンティティを利用する術を身につけていったのである。

T は、2011 年シーズンを再び関西独立リーグで過ごした後、自らの夢へ最後の場所として韓国へ渡った。KBO 球団のトライアウトを受けるためであった。KBO は新球団の参入を決め、プロ野球選手の門戸は広がりとつある。この挑戦に際して、彼が「コリアン」というルーツを利用したことは言うまでもない²⁰⁾。

まとめ

本稿は、独立リーグという、プロスポーツのグローバルな拡大の結果出現した上位リーグへの選手送出を主目的とした競技レベルが高いとは言えないプロスポーツの出現の一諸相としてのあるアスリートの移動によって生じたアイデンティティの変容を述べたものに過ぎない。したがって、グローバル化の結果としての人々の移動の量的距離的な拡大における人々のアイデンティティの変容を一般化したものではない。

しかし、それぞれ置かれた立場の違う世界中の人々のアイデンティティをある基準から一般化することは本来的に難しい。自発的なものというよりは、国家や支配者などの本来的な外部から刷り込まれたとされることの多いグローバル化における人々のナショナリティ、エスニシティに基づくアイデンティティであるが（アンダーソン：1997、西川：1998）、本稿の研究対象であるTのストーリーからは、日本社会においても、韓国社会においても決して有利には働かなかった「在日コリアン」のアイデンティティをある意味したたかに利用するグローバル化の只中に身を置く現在の青年の姿が見て取れた。

プロ野球選手という自己実現を夢見て国際移動を重ねたTはそのことによって、自己の中で封印していた「コリアン」としてのアイデンティティを再活性化させたが、帰国後、サラリーマン生活を経て、韓国人の若者にプロ野球選手という夢への挑戦の場を提供する韓国球団へ入団する際には、彼の中で「コリアン」としてのアイデンティティは強化されたとともに、そのエスニックなアイデンティティは彼の中で自己実現のためのツールと化していた。そして、夢をあきらめきれず、さらなる越境を重ねた先の豪州においては、移動先の多文化多民族的な社会の中、「コリアン」は単なる記号に過ぎず、彼の意識の中ではナショナリティやエスニシティにこだわらないコスモポリタンのアイデンティティが醸成されていた。

従来のアスリートの移動研究においては、このようなコスモポリタンな意識は、巨万の富を築いた世界レベルでのトップアスリートが持つものだとされていた。しかし、プロスポーツにおいて地球規模でのネットワークが構築される中、スポーツの技能を通じた越境はプレーレベルの決して高くないアスリートにとっても可能なものとなっている（石原：2010a,b,c）。このようなアスリートの国際移動の量的な拡大と移動元と移動先の往復の頻度の増大を伴うスポーツのグローバルな拡大の中、人々のアイデンティティは安定の度合いを弱め、混淆化していく（Juffer:2002）。近代を迎えて人々に国家という枠組みをある意味押し付けてきたナショナル・アイデンティティも、それを規定してきた国籍とともに、かつてのような人々の意識の上での重さを失いつつある。本稿で取り上げた在日コリアンのTも、スポーツをきっかけとした国際移動を始めた時には、自己の意識の中で封印していた「コリアン」・アイデンティティを意識せざるを得ない状況になり、越境は彼の中で、エスニックなアイデンティティを強化させていった。しかし、帰国後、入団した韓国人チームにおいては、言語、習慣の違う祖国であるはずの韓国人選手たちとの相違を目の当たりにしてその「コリアン」・アイデンティティは「在日」という枕詞つきのものであったことを思い知らされることになった。しかし、彼がプロ野球選手という自己実現への挑戦を再開することができたのは、彼が「コリアン」であったからであり、彼はここで「コリアン」という出自を越境のためのツールとして利用することを覚えたと言える。

スポーツのグローバル化の中、国籍やナショナル、あるいはエスニックなアイデンティティを越境のツールとしてアスリートが利用する事例はすでに報告されている（Falcous & Maguire：2011, Molnar：2011）。国際的なスポーツの祭典である五輪の場においても、1984年のロサンゼルス大会以降急速に進んだ商業主義化の中、現在においては様々な競技において国籍変更による出場権の獲得が報告されている（松尾：2010）。また、国際大会における韓国人選手の活躍について、現在、それはナショナルリズムの表象というよりは、年金や兵役免除という個人の利益がその動因となりつつあることも指摘されている（大島：2008, 242-243）。

これらから窺えるのは、スポーツのグローバルな拡大の中、自己の利益のためにスポーツ技能を利用するアスリートの姿であり、そこではエスニシティやナショナルリティは、富を求めた越境、あるいはプレー継続のためのツール以上のもではなくなっている。

競技の場において、特に日本相手のときには強烈なナショナル・アイデンティティを表出する韓国人選手も、例えば、野球においてはKBOのトップ選手の目は、大金を得ることのできる日本や米国に向きつつある（Reaves：2002, 128-129）。KBO創設時において「僑胞」選手の多くが見せた「コリアン」としての意識や、NPBでプレーする「在日」選手の根強い「コリアン」としてのアイデンティティ（金村：2000）など「コリアン」たちのナショナル、あるいはエスニックなアイデンティティは「民族」に由来した確固たるものように語られることが多いが、この近代社会を迎えて「想像」されたアイデンティティは、近代が終わりを告げようとしているとも言われる現在において、グローバルに移動を重ねる人々にとって、越境のツールと化していることが、Tの事例からはうかがえた。

注

- 1) サッカーが朝鮮半島に伝来した時期については諸説あるが、19世紀末に朝鮮王朝の開放政策により来朝した外国人教師や宣教師によるものであることには異論はない（金：2009, 68-71）。
- 2) 但し、金（2009）の論文においては、「国民の一体化」は「国民＝民族」と示されている。この表現は、北朝鮮の問題をはらんだエスニシティとしての「民族」について考えるならば、大いに疑問が残るものである。従って本稿においては、「国民の一体化」という表現に置き換えた。
- 3) 「ベースボール・アカデミー」とは、米国内のプロ志望の高校、大学生や卒業生を集めて行うトレーニングキャンプのことで、MLBのスカウトを集めてめばしい選手を獲得してもらうものである。現在では、日本の業者やNPOが日本人選手をここに送り込む橋渡し役をしている。
- 4) ここで言う「野球留学」とは、長期短期問わず、一定期間北米において現地の選手に交じって野球のトレーニングをすることを指す。現在、このような一種のツーリズムと化した「本場の野球体験」を日本の多くの若者が経験し、自らのライフストーリーの中で「野球留学」と位置付けている。
- 5) 大西（2010）のTに関するルポタージュでは、このアカデミーでのプレーが認められて、MLBのスカウトから契約の話が持ち込まれたものの、当時まだプロでやっていく自信のなかったTはこれを断ったとあるが、本人に確認したところ、本文どおり怪我のため契約を見送られたのが真相であった。筆者が最初に行ったインタビュー（2010.7.23, 兵庫県三田市城山球場）の際のTの発言とルポタージュとの間には、多くの相違があったが、これに関しては、筆者は改めて本人に確認をとった。
- 6) 「スカウティング・リーグ」とは、MLBのドラフトに漏れた学卒選手やプロ志望の学生などを集めて、主に夏季休暇中に行う北米のアマチュアリーグである。プレーに対する報酬はなく、Tの場合、衣食住についてはスカウトが用意してくれ、野球教室でのコーチングに対して報酬を得ていたという。
- 7) 独立野球リーグとは、北米においてはMLB、日本においてはNPBなどの既存のプロリーグのファームとしてではなく、独立して運営されているプロ野球リーグのことをいう。

- 8) 北米では、野球以外の定職をもつものや学生がプレーし、試合参加に関してのみ手当が支給される野球リーグをセミプロリーグと呼んでいる。このようなリーグは、北米では一般にはプロとはみなされない。
- 9) この球団は、シーズン途中で財政破綻を起こしたため運営会社を変更し、「コリア・ヘチ」と名を改めた。2011年シーズンを迎えるに当たってはさらに「ソウル・ヘチ」と改名した。
- 10) このチームの他のメンバーは韓国プロ野球（KBO）の元選手や所属をなくしたアマチュア選手、それに日本の大学を卒業した韓国人元留学生であった。3人いた指導者のうち監督とコーチ1人は韓国人で、もうひとりのコーチは日韓両国のプロ野球でプレー経験のある在日コリアンだった。またシーズン開幕直後にNPBからKBOへ移籍し、前年にKBO球団を解雇されていた在日コリアン選手Oが入団した。
- 11) 但し、彼の所属する韓国球団だけは、韓国人選手が興行ビザで来日し、プロ野球興行以外の労働を行うことができなかつたため、他のチームの選手のようにアルバイトをしながらプレーを続けるということができず、Tを含む所属選手全員にシーズン終了まで月8万円の給与が支払われた。
- 12) 但し、このプロ野球リーグ、オーストラリアン・ベースボールリーグは、選手の兼業を認めており、国外の球団と契約している以外のオーストラリア人選手のほとんどは野球選手以外の職をもっているため、北米的な見方からすればセミプロリーグというべきものである（石原：2011）。
- 13) これに対して、同年代であっても在日2世の「コリアン」に対する眺めは随分と違う。Tと同じ韓国球団でプレーしていた元NPBの選手Oは、周囲からのいじめなどから、幼少の頃より自分が「在日」であることを強烈に意識し、自らのアイデンティティを「コリアン」に重ね合わせていたという。その理由について彼は、祖母が韓国に健在であることを挙げていた。既述の通り彼はKBOでもプレーしたが、その際レギュラーポジションを獲得できず、祖母に晴れ姿を見せられなかったことを悔やんでいた。彼はまた、KBO球団でポジションを獲得できなかった理由の一つにコーチとの確執を挙げていたが、「コリアン」を自称しながら韓国語を話せない彼に周囲の反応は冷たかつたという。未だ韓国籍のままで、今後も日本国籍を取るつもりはないという彼でさえ、「祖国」においては「在日」でしかない自己を意識せざるを得なかつたことが彼の事例からは窺える（Oへのインタビュー、2011.9.18、大阪市住之江球場）。
- 14) Tへのインタビュー（2010.7.23、兵庫県三田市城山球場）
- 15) 但し、この方針は一貫したものではなかつたようで、リーグが発行した選手名鑑においては、彼は日本名で紹介されている。
- 16) 但し彼は球団が韓国人選手のために借り切ったアパートではなく、その近くのアパートに部屋を借りていた。
- 17) Tへのインタビュー（2010.9.25、兵庫県三田市城山球場）
- 18) Tへのインタビュー（2010.12.30、オーストラリア・ブリスベン、RNAショウグラウンド）
- 19) 但し、Maguireのスポーツ労働移民の分類における「ノマディック・コスモポリタン」は、当該競技における世界的視点から見たトッププロ選手を射程においたものである。従来のスポーツ労働移民研究の対象は、国際的にもトップレベルの競技力を持つ選手の移動であったが、プロ化を伴ったスポーツのグローバルな拡大の中、当該競技の地球規模でのトップリーグへの選手送出の役割を担うようになった事実上のファームリーグにおいては、従来想定されていたよりも競技レベルの低いプロアスリートが出現している。このようなリーグにおいては、先進国から、経済的動機よりも競技を通じた自己実現を主たる移動理由としたスポーツ労働移民がみられる（石原：2010c、Elliott & Maguire：2011）。Tのスポーツを通じた越境もこの一例であると言える。Agergaard & Botelho（2011）も、プロという競技キャリア実現のため経済的要因を無視した形で越境を行う先進国出身の女性サッカー選手の例を分析しているが、このような新たな形のスポーツ労働移民については、ジェンダーの面からも考察する必要があるだろう。
- 20) かつてKBOが外国人選手を受け入れてなかつた時代には、国籍変更者であっても韓国籍で生まれた者に関しては「在外同胞」選手として入団を許可していたが、現在、KBOは国籍を重視する方針を採っている。日本に生まれ育っても、韓国籍をもっている者は国内選手扱いであるが、韓国籍を失った者は外国人扱いとなる。従ってTは、各球団2人までの「外国籍選手」の枠でしかKBO球団とは契約できない。このことをTが知っていたかは不明だが、Tと一緒にKBOのトライアウトを受験するため渡航する予定であったOは、Tはこの制度をおそらく知らないだろうと言っていた（Oへのインタビュー、2011.9.18、大阪市住之江球場）。

参考文献

- ・Agergaard, Sine & Botelho, Vera (2011). Female Football Migration: Motivation Factors for Early Migratory Processes, in Joseph Maguire & Mark Faloutsos (ed.) *Sport and Migration: Borders, Boundaries and Crossings*, Routledge, 157-172.
- ・アンダーソン, ベネディクト (白石隆、白石さや訳) (1997). 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT出版

- (糟谷啓介他訳) (2005). 『比較の亡霊』 作品社
- ・ アパデュライ, アルジュン (門田健一訳) (2004). 『さまよえる近代: グローバル化の文化研究』 平凡社
 - ・ Bruce, Tom & Wheaton, Belinda (2011). *Diaspora and Global Sports Migration: A Case Study in the English and New Zealand Contexts*, in Joseph Maguire & Mark Falcous (ed.) *Sport and Migration: Borders, Boundaries and Crossings*, Routledge, 189-199.
 - ・ Elliott, Richard & Maguire, Joseph (2011). 'Net-gains': Informal Recruiting, Canadian Players and British Professional Ice Hockey, in Joseph Maguire & Mark Falcous (ed.) *Sport and Migration: Borders, Boundaries and Crossings*, Routledge, 102-111.
 - ・ Falcous, Mark & Maguire, Joseph (2011). *Globetrotters in Local Contexts: Basketball Migrants, Fans and Local Identities*, in Joseph Maguire & Mark Falcous (ed.) *Sport and Migration: Borders, Boundaries and Crossings*, Routledge, 175-188.
 - ・ 藤田結子 (2008). 『文化移民: 越境する日本の若者とメディア』 新曜社
 - ・ 石原豊一 (2010a). 「プロ野球をめぐるグローバルな相互連関関係=「ベースボール・レジーム」の構築と拡大についての一考察—2008年世界プロ野球におけるスポーツ労働移民の分析から—」 『ベースボールロジー』 11, 46-78.
 - (2010b). 「独立野球リーグの現状—企業スポーツからプロリーグへ—」 『体育の科学』 60 (5), 318-322.
 - (2010c). 「プロスポーツのグローバル化におけるスポーツ労働移民の変容—野球不毛の地イスラエルに集うプロ野球選手の観察から—」 『スポーツ社会学研究』 18 (1), 59-70.
 - (2011). 「ベースボールにみるグローバル化 (3) —越境する北米野球のファームとしてのオーストラリアプロ野球—」 (査読中論文)
 - ・ Juffer, Jane (2002). *Who's the Man?: Sammy Sosa, Latinos, and Televisual Redefinitions of the "American" Pastime*, *Journal of Sport and Social Issues*, 26, 337-359.
 - ・ 金村義明 (2000). 『在日魂』 講談社
 - ・ 加藤恵津子 (2009). 『「自分探し」の移民たち—カナダ・バンクーバ、さまよう日本の若者』 彩流社
 - ・ 金明美 (2009). 『サッカーからみる日韓のナショナルリティとローカリティー—地域スポーツ実践の場への文化人類学的アプローチ—』 御茶の水書房
 - ・ King-White, Ryan (2010). *Danny Almonte: Discursive Construction (s) of (Im) migrant Citizenship in Neoliberal America*, *Sociology of Sport Journal*, 27, 178-199.
 - ・ Klein, Alan (1991). *Sport and Culture as Contested Terrain: Americanization in the Caribbean*, *Sociology of Sport Journal*, 8, 79-86
 - (1995). *Tender Machos: Masculine Contrasts in the Mexican Baseball League*, *Sociology of Sport Journal*, 12, 370-388.
 - ・ Maguire, Joseph (1996). *Blade Runners: Canadian Migrants, Ice Hockey, and the Global Sports Process*, *Journal of Sport & Social Issues*, 20, 335-360.
 - ・ 松尾理也 (2011). 「五輪の中の世界・広がる国籍変更」 『産経新聞』 2010.2.23
 - ・ Molnar, Gyoza (2011). *From the Soviet Bloc to the European Community: Migrating Professional Footballers in and of Hungary*, in Joseph Maguire & Mark Falcous (ed.) *Sport and Migration: Borders, Boundaries and Crossings*, Routledge, 56-70.
 - ・ 森津千尋 (2011). 「植民地朝鮮におけるスポーツとメディア—『京城日報』の言説分析を中心に—」, 『スポーツ社会学研究』 19-1, 89-100.
 - ・ 西川長夫 (1998). 『国民国家論の射程: あるいは〈国民〉という怪物について』 柏書房
 - ・ 大西順也 (2010). 「なにわ韓流野球伝」 1~6, 『読売新聞 (夕刊)』 2010.8.23~8.28.
 - ・ 大島祐史 (2006). 『韓国野球の源流: 玄海灘のフィールド・オブ・ドリームス』 新幹社
 - (2008). 『コリアンスポーツ〈克己〉戦争』 新潮社
 - ・ Reaves, Joseph A (2002). *Taking in a Game: A History of Baseball in Asia*, University of Nebraska Press.
 - ・ 関川夏央 (1988). 『海峡を越えたホームラン: 祖国という名の異文化』 朝日文庫
 - ・ 鄭仁和 (1989). 『いつの日か海峡を越えて: 韓国プロ野球に賭けた男たち』 文春文庫
 - ・ 鄭大均 (2003). 『韓国のナショナルリズム』 岩波現代文庫
 - ・ ホワイティング, ロバート、鈴木武樹訳 (1980). 『菊とバット: プロ野球にみるニッポンスタイル』 サイマル出版会
 - 、玉木正之訳 (1990). 『和をもって日本となす』 角川書店

【2011年12月9日レフェリーの審査を経て掲載決定】